



特別
イ 4
3163
28



貴

14
3163
28

東海に乃る船の後跡ありてんはうもおぼろ
る向の力に起出およるはきりおぼろし成り
うき身とて厭ひをうききり我の船跡を
りまきりおぼろしとていかに人の船人
との成跡にきりいかにさうりともおぼろし
とていかにさうりともおぼろしとていかに
おぼろしとていかにさうりともおぼろし

雑十首

おろけなる我が船跡もおぼろしとていかに
都出くまの船跡を載りて帰らんはよ
いりおぼろしとていかにさうりともおぼろし

中菴拾遺五

おろけなる我が船跡もおぼろしとていかに
かきりてうきおぼろしとていかにさうりとも
世中いかにさうりともおぼろしとていかに
おぼろしとていかにさうりともおぼろし
おぼろしとていかにさうりともおぼろし
おぼろしとていかにさうりともおぼろし
おぼろしとていかにさうりともおぼろし
おぼろしとていかにさうりともおぼろし

右一巻借沼活所抄本於筑前國姪濱檀村寺
不違一字書寫遂一校畢

天正十五年六月二日

高野日記

釋頓阿

たのびらへつりてはるるるはるのほとてあつ
ふらふら衣城つらうはらやうはものよそかめ
つて坂をわりたる作ありはらちうあつ併らこ
いへるるるるるるるるるるるるるるるるる
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
とらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
てらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

中巻於遺六全

また行はれ教のまをりしとてさしつゝかこ
え侍りくちの院とていふをいふ風なまを
てまおつたすあ

乃ほりていん院も時ぬしとて院のまを
名もまぬ原は院の初りてまをいふまを
かきつゝ松さして古寺は院のまをいふ
秋はあまなりやまゝ院とていふ院とていふ
て細えの院とていふ院とていふ院とていふ
つゝのまそとぬは院のまをいふ院とていふ

りてまをいふ院は院のまをいふ院とていふ
とあはれいふ

この院はまをいふ院とていふ院とていふ院と
まをいふ院とていふ院とていふ院とていふ
しはまをいふ院とていふ院とていふ院と
と大師の院のまをいふ院とていふ院と
ちとていふ院のまをいふ院とていふ院と
けまをいふ院とていふ院とていふ院と
とあまの院とていふ院とていふ院と
まをいふ院とていふ院とていふ院と
とていふ院のまをいふ院とていふ院と
まをいふ院とていふ院とていふ院と
あまの院とていふ院とていふ院と

ねの取れた事無執もよそ見けるぬりまよし似いら
 此山も教文なるありみまたのいさうける周制
 とけいまきまのいさうけるさけり降信教ん乃
 大原教書らる教色事のそくえんを承承これの
 こと同業し大いさうして又事の成あましむまめと
 法性もあはまよ下つはするよけりしかき事この
 ひ今教書よみえき世の痛もいさうあぬたや
 いさうあつ九成りもけりさうる寂光院の北坊
 しまくえけるみさきまのひやいさうし信文教
 の山骨教あは事の四巻いさうこと同業御教書
 乃まなるあいらい御書もさうさうけりし屋ら海流

山麓於ハ

殿田上たいたを後川よのそきさのやあしわよ乃
 釣後不々此景あのもあひ水のさうらそそのお、
 乃らさまをかさあさしと七眼つさうさ
 やうさける信教教團へおきむさうおあつさう
 けりし御さうさけは教書あつて法教を
 うささ教書ひして七條女院のさうけりし
 をもたつみさうけりさうさう御教書さうさ
 けりしつさうけりさうさうさうさうさ
 らもひさるもやうお骨教つて大原つてもあつ
 させ終へし大けい山教書さうさうさうさ
 院教坊さうさうさうの教書さうさうさうさ

けり行の事とらんあそあそそまを馬がけり
 又字おのきのもんあつたけりしとておひとあり
 きてかものなるれとていふおとていふ出を其
 ちみおつてもまらる中し七十もいけぬ後
 の我名に海象といふていふに靡ちつたるく
 てあつてもいふさつていふかくもあていしてあ
 つてせぬんとのいふせしつていふ位のやうに
 らよとてうちていふと粟おひしそひとたまた
 ぬのらうり十二とけりれ小僧とていふておまの
 ありおまおひとていふとていふとていふしお
 のいふしおとていふと世の外とありおとていふは

ところをて人の身おとていふていふていふて
 人身をてめわていふていふて海象れ縁ありて
 のいふ中し大師はけりていふていふていふて
 いしてたまたまのいふていふていふていふて
 らぬとていふていふていふていふていふて
 をていふていふていふていふていふていふて
 ちていふていふていふていふていふていふて

いふて佛の道教もあつたていふていふていふて
 るをかをていふていふていふていふていふて
 はちていふていふていふていふていふていふて

いふり力に親よるも何故つゝ九子や嬉し
ほのしと明り夜をまのむきハカも嬉しおれおれ
つゝあはれなきもしと親も後知れぬもたつ
こころ世に下りて厭ふ身こそ人知れぬ物なり
ちのいふまじきもあはれおつゝ伝ふれ一
り念ふをも我しなかなるもつゝ人の世を
ぬらほし親ともよき世にめでたひつゝ愛も
るこ親の思ひやも御心ハ水に沈む水乃月
をぬらハ親の思ひも世をたつゝも人乃心
わがぬらハ親の思ひも世をたつゝも人乃心
かまらつゝも愛ぬらハ親の思ひも世をたつゝも人乃心

昔年いふもよき親の思ひも世をたつゝも人乃心
たつゝもよき親の思ひも世をたつゝも人乃心
思ふもよき親の思ひも世をたつゝも人乃心
つゝもよき親の思ひも世をたつゝも人乃心
はかす親の思ひも世をたつゝも人乃心
ぬらハ親の思ひも世をたつゝも人乃心
たつゝもよき親の思ひも世をたつゝも人乃心
つゝもよき親の思ひも世をたつゝも人乃心
つゝもよき親の思ひも世をたつゝも人乃心
今もよき親の思ひも世をたつゝも人乃心

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or philosophical passage.

Handwritten text in a cursive script, continuing the passage from the previous line.

Handwritten text in a cursive script, continuing the passage.

Handwritten text in a cursive script, appearing as a separate line or phrase.

Handwritten text in a cursive script, continuing the passage.

Handwritten text in a cursive script, appearing as a separate line or phrase.

Handwritten text in a cursive script, continuing the passage.

Handwritten text in a cursive script, continuing the passage.

Handwritten text in a cursive script, continuing the passage.

Handwritten text in a cursive script, continuing the passage.

Main body of handwritten text in a cursive script, consisting of several lines.

Handwritten text in a cursive script, appearing as a separate line or phrase.

Handwritten text in a cursive script, continuing the passage.

Handwritten text in a cursive script, continuing the passage.

Handwritten text in a cursive script, continuing the passage.

Handwritten text in a cursive script, continuing the passage.

なるものありつゝなりて又もよるる

わがはるるむねは身ながらおぼほも今もあまの御心

國分寺什物

聖武皇帝金泥紙廣經

光孝天皇勅作阿彌陀之字

新羅大勅之國分佛生ると云令泥ノ紙

源義経寺納體之領た刀之柄

順徳院宏等額長徳山最勝院國分佛生寺

後鳥羽院宸筆之井百首

源實朝之自筆寺領附

唯之現也

貞治三年二月下旬

権長阿

山番於 十四

愚問賢答跋

長阿

作隱遁能始修學の時根之紀主能十夢中ニ志
附を勤よかつといふ爰ハ稱述遣法弟子佛教
をさしとて徳典を學ぶとて成志者能とす
いふ我見及侍りしよりふかく悔愧能とて生
して和言能廣學教とては道英宗とあふ
いふとも古來判説をさす申さつともさす能也
をもて以湯斗教之曰陰翳中之内之山林閑
之時發差介と果色不覺之泉石入膏育積累
氣為痼疾能似潛江山之幽堂以善當善之勅
御問答一と遂之他能能能應世之説又問うる事依

有るに偏に投言と云我流付御業と云は是併發を
もてあつていふやうにいふ事成されては御流を付ら
むといふ一といふ上流流ら流入火中といふ類する所
なり

御製

執事程の思ひお推しな御流の道は相とて事ありと

いふ一

相の

聖井とていふこと御流の流は流の流なり
いふことなり

相の流はいふこと御流の流は流なり
國院後相の流は流なり
とていふこといふこと御流の流は流なり
之を流は流なりいふこと御流の流は流なり
言を流は流なりいふこと御流の流は流なり
流は流なりいふこと御流の流は流なり
おせしめ流は流なりいふこと御流の流は流なり
及月次百といふ御流の流は流なり
ありといふこと御流の流は流なり
流は流なりいふこと御流の流は流なり
御流の流は流なりいふこと御流の流は流なり

親意と侍とてもつゝいふ事能間なるとい
る者もその時のなほ人らし判者の古槐と
ありて彼大御を侍とて侍とて侍とて侍と
侍と又侍とて侍とて侍とて侍とて侍と
院小村は下り日年能本とて宮へ侍と
るれと侍とて侍とて侍と

中巻拾附録初

附録

二條後福光園撰政殿百首 觀應三年八月十八日

春二十首

閑詠古槐列

いづれか歌まういふれおのその屋を侍とて侍と

安詞克綱のれ

御座此浦や堤のそとくまゝに思ひぬ方よりさあま
まの里より侍とて侍とて侍とて侍とて侍と
雪清ぬさるる里ハそのなほ成り侍とて侍と
書柳を京の侍とて侍とて侍とて侍とて侍と
也の侍とて侍とて侍とて侍とて侍と

寛政二歳庚戌仲夏

京師書林

大坂書林

同

同

武村新之清

加藤六蔵

岩崎徳太郎

葛城長三郎

中庵附録七

部類現案和歌集

全部 十六冊

在正徳秋新題林十巻を在河内む九巻万一子余首
寛く年一号月日詳小志す

百家集歌題

全部 壹冊

在正徳阿婆運浄糸女四英の和歌を志すくを集む

古今歌句

全部 二十冊

在正徳六家集源氏袂衣伊勢物語大和物語其外和歌を四巻少く引和歌考索は備ふ

掌中たま草

全部 壹冊

和歌新詞をいふはかきく懐中本なり一巻和歌漢教は採ふ

新三玉和歌集類題

全部 壹冊

後水尾院 中流通茂卿 烏丸光榮卿 御歌を集む

